

瞬間（刹那）と可分性・不可分性

——現代形而上学の stage theory と仏教の刹那滅説——※

酒井真道

一 序論——本稿の目的——

比較思想の学徒にとって「時間」は好個な主題の一つである。それは「時間」が古今と東西とを問わず人類の知的な営みにおける普遍的な思索対象であることによる。本稿もまた「時間」を巡る比較思想の試みの一つであり、その目的は、仏教論理学の大成者 Dhamakīrti（七世紀前半頃）と彼の後継者たちの時間論と、現代哲学の最前線にある現代形而上学者たちの時間論とを対照し、双方による対話の道を拓くことにある。仏教論理学研究に軸足を置く筆者のこの目論見の背景には、Dhamakīrti が主張する刹那滅説——対象は生じたその刹那に滅する刹那的なものであるとする説——と類似する立場が現代形而上学の中で主張されているという事実がある。この立場は stage theory（または exdurantism）と称されるものの、提唱者は

Theodore Sider と Katherine Hawley である。そして、本論で詳論するように、双方の時間論は共通する普遍的問題意識を背景として構築されており、その問題意識を議論の中心点として双方を対照することにより、より妥当な仕方での比較思想が可能となると考えられる。更にまた、共通の問題意識をもつ双方の間に対話の道を拓くことは十分に可能であり、これは仏教思想を現代思想の中で問い、また更に、双方の理論の相互照射という点で意義ある試みであると思われる。

結論を先取りする形で双方の対照研究の結果を述べれば、両者は、対象は瞬間的に存在するという最終的な立場においては同じである。しかし、双方は、瞬間（刹那）が分量をもつか否か、換言すれば、分割可能か否か、という点で相違している。そして、双方を対照研究する上で最も興味深いのは、確かに両者は同じ普遍的な問題意識を共有しているが、stage theory は

対象の存続の仕方についてより良い説明を与えるための理論であって、対する刹那滅説は対象のなくなり方を説明するための理論であるということである。つまり、双方は正反対のベクトルをもちつつも、最終的には同じ結論に到達しているのである。

以下では、第二節において現代形而上学における stage theory 登場の背景と stage theory の内容を概説的に述べ、次いで第三節においては現代形而上学者とインドの仏教徒とが共通に認識する形而上学上の普遍的問題に着目して仏教徒の立場を特徴づける。そして、第四節では、瞬間（刹那）の可分性と不可分性についての双方の立場の違いを考察したい。以上を踏まえ終節においては、真逆のベクトルのもつ双方の哲学的対話の予想図を筆者なりに描いてみたい。

二 Stage theory 登場の背景と stage theory の概略

1 現代形而上学の三理論

——endurantism と perdurantism と stage theory

Stage theory は perdurantism と呼ばれる存在論から派生した理論である。そこで、perdurantism は、endurantism と呼ばれる存在論のアンチテーゼとして立てられた理論である。これらの三理論は、時間における対象の存在の仕方を問う中で立てられたもので、とりわけ対象の変化と同一性を巡る問題に対する、現代形而上学の主流の三理論である。

2 対象の変化と同一性を巡る問題

対象の変化と同一性を巡る問題とは以下である。例えば、私が見たバナナが緑色をしたバナナを月曜に買うとする。水曜に私がバナナを見ると黄色となっている。endurantism は月曜のバナナと水曜のバナナは同じバナナであると理解する立場である。この常識的立場は西洋形而上学においては困難な問題に直面する。それは、この理解が、諸対象の同一性を規定する “indiscernibility of identicals” ——「同一諸対象の不可識別性」——と呼ばれる法則に抵触するからである。これは「対象 x と対象 y とが同一であるということは、その両者は属性を全く等しくしているということを意味する」という法則である。これに従えば、月曜のバナナと水曜のバナナが同じであると認めることは、月曜のバナナと水曜のバナナは属性を全く等しくしているということと認めることである。これは、月曜のバナナは緑色という属性のみならず黄色という属性ももっており、水曜のバナナは黄色という属性のみならず緑色という属性ももっているということと認めることに他ならない。同一の一本のバナナが緑色と黄色という両立不可能な属性をもつことは矛盾する。これが対象の変化と同一性を巡る問題である。

(一) Endurantism の立場からの回答

この問題に対して、endurantism の立場に立つ現代形而上学者は幾つかの回答を用意するが、stage theory を論じる本稿で重要であるのは、バナナ自体ではなく属性側に時間要素を関

係づければ問題は解決されるという回答である。この立場では、同一のバナナが「月曜において緑色」という属性と「水曜において黄色」という属性とをもつと理解される。この立場を採る者は、属性が時間に関係づけられるので両立不可能な属性がバナナに存していても矛盾はないと言う⁽³⁾。

(2) Endurantism の問題と Perdurantism

Stage theory がそこから派生することになる perdurantism は前述の回答に疑問を呈する形而上学者から提起される。その先鋒が perdurantism の提唱者 David Lewis である。彼は、色等の属性は対象の内在的属性であって、それが特定の時間に関係づけられるというのは信じられない、という旨を主張する。色は対象がそれ自体で有する内在的属性である。Lewis は、そういった内在的属性は対象が無条件に、即ち他との関係を期待することなく、有するものでなければならぬと考える⁽⁴⁾。

「同一諸対象の不可識別性」の法則を損なうことなく、対象が両立不可能な属性を無条件にもつことを説明するために主張されたのが perdurantism である。これによれば、バナナ等の対象は空間だけではなく、四番目の次元である時間にも広がる四次元物体であって、それを時間軸にそってスライスすれば、無限の時間的部分 (temporal parts) に分けられるという。そして、その無限にある時間的部分のうち、月曜という時点に位置する部分に緑色という属性があり、水曜という時点に位置する部分に黄色という属性がある、というのがこの立場である。こ

の場合、各時間的部分には無条件に内在的属性が存在することになる。

Endurantism では、月曜のバナナも、水曜のそれも、全体として存在する同一のバナナである。他方、perdurantism では、「月曜のバナナ」は一本のバナナの、月曜という時点に位置する部分のことを指し、「水曜のバナナ」はその同じ一本のバナナの、水曜という時点に位置する、それとは別の部分のことを言う。即ち、perdurantism では、時間軸にそって並ぶ時間的部分の集合体こそがその一本の全体的バナナであると理解される。この説では、一本のバナナの各々異なった部分に緑色という属性と黄色という属性があるのであるから、同一基体における両立不可能な属性の同時的存在という矛盾は起こらない。

(3) Perdurantism の問題と Stage Theory

Stage theory の提唱者たちは perdurantism が描き出す四次元主義存在論に賛同するが、その上で perdurantism の問題点を指摘し、その改良版として stage theory を立てる。彼らが指摘する問題は幾つか存在するが、本稿において重要なのは、endurantism に対する Lewis の批判は Lewis 自身の説にも当てはまるという問題である。即ち、内在的属性は対象が無条件にもつものであるとして endurantism を批判した Lewis であるが、Lewis の perdurantism において属性を無条件にもつのは対象の、特定の時間的部分であって、対象そのものではなく、それを「無条件に」と言えるのか、という指摘である。即ち、

彼の説でも内在的属性は外在者である特定の時間との関係から独立を果たせないという問題⁵⁾である。これを回避するにはバナナの当該の時間的部分だけをバナナとして理解するしかない。即ち、stage theory ではバナナを時間的部分の集合体とは理解せず、時間的な部分そのみとして理解する。このように、彼らは集合体を物質的対象として認めないので、それを前提とする「部分」(Part)という語の使用を避ける。それゆえに、彼らは自説を stage theory と呼ぶ。この存在論によれば、月曜という時点のバナナ・ステージが緑色という内在的属性を無条件にもち、水曜という時点のバナナ・ステージが黄色という内在的属性を無条件にもつ。そして、月曜のバナナ・ステージと水曜のバナナ・ステージとは別々の対象である。ここでは、両立不可能な属性が同時に起こるという矛盾はない。そして、この立場におけるバナナの変化とは、バナナ・ステージが別になることに他ならない。

(1) Stage の長⁶⁾

Stage theory の提唱者の一人である Hawley はこのステージの長さ⁷⁾と、対象の変化との関係について次のように述べる。

バナナは緑から黄へと熟する。なぜならば前の諸々のものは緑で、後の諸々のものは黄であるから。変化の説明をするためには、諸ステージそして諸部分は、変化と同じだけきめ細やかでなければならぬ。即ち、物質的対象は、それがその生存期間中に両立不可能な状態にある分だけ多く

の諸ステージそして諸部分をもたねばならない。もしもそれが、それがもっていた諸ステージそして諸部分よりも多くの両立不可能な状態にあったとするならば、その場合、それがもつ諸ステージそして諸部分の、少なくともひとつは、それ自体諸ステージそして諸部分をもたずして両立不可能な状態にあるということになってしまい、そして変化の問題が再び生じることになってしまう。諸ステージは変化と同じだけきめ細やかでなければならぬ。これは、つまり、諸ステージはそれ自体不変でなければならぬということである⁶⁾。

同一対象が時間の中で両立不可能な属性をもつことを整合的に説明するという目的をもつ stage theory ではステージは変化と同じだけきめ細やかでなくてはならない。そして、ステージの数は、その当該の対象の、両立不可能である状態の数に対応する。これゆえ Hawley はステージ自体は不変化のものでなくてはならないと主張する。それは、ステージそのものが変化するものであったならば、そこに両立不可能な状態がそれぞれに顕れることが不可能となってしまうからである。

そして Hawley はこのようなステージの、このきめ細やかさの時間的長さ⁸⁾を瞬間として理解する。Hawley は、変化とそれに対応するステージの長さ⁹⁾を検討するに際し、変化を実際に起こる変化と起こりうる可能な変化とに分けて考える。前者を尺度にステージの長さ¹⁰⁾を考えると、ステージの長さはそれぞれの

場合の変化の長さに一対一で対応するので、個々別々となる。しかし、Hawley は最終的には前者を採らず、後者の視点からステージの長さを検討し、それを瞬間とする⁽⁷⁾。後者を採ることでは Hawley は、変化のメタ・レベルでの長さとして瞬間を設定しているわけである。かくして stage theory は以下のような立場として説明される。

Exdurantism を採る者にとって、あらゆる対象は瞬間の間だけ存在し、そしてあらゆる対象は、それがその当該の瞬間に有している、まさにその諸属性だけをもつ⁽⁸⁾。

三 共通する普遍的問題意識と仏教徒の立場

——両立不可能な属性の問題——

以上のように、現代形而上学の時間論の課題の一つは同一対象が両立不可能な内在的属性をもつことを「同一諸対象の不可識別性」の法則を損なうことなく説明することである。

インド仏教の思想家たちもまた、彼らと同様、同一の対象が両立不可能な属性をもつことの不合理性を認識している。これが双方に共通する形而上学の普遍的問題意識である。以下に見る Vasubandhu (四世紀頃) の言明にはこの問題意識が鮮明に現れている。

「対論者曰く」「対象は」変化したのである。[Vasubandhu 曰く] その同一「対象」に変化があるというの是不合理である。なぜならば、他でもないその同一「対象」がそれ自

身とは異なる特徴をもつというの是不合理だから⁽⁹⁾。

この一節は彼の著作『俱舍論』の第四章(業品)における、刹那滅の証明の文脈に登場するものである。そこで Vasubandhu と対論者は対象の滅し方について議論する。刹那滅説を認めない対論者は、対象は直ちにはなく、変化を経て、最後に滅すると主張する。言うなれば、バナナは緑から黄となり、茶、黒と変色、腐敗し、最後になくなるという過程が対論者によつては想定されている。両立不可能な属性という表現はここには見られないが、Vasubandhu は、同一対象が前と後とで特徴を異にするの是不合理であると述べる。つまり彼は、前の対象と後の対象とが、その特徴の点で識別可能であるならば、両者は同一であるとは言えないと述べている。この考え方は、Dhamakruti に至ると、以下のように厳密かつ直接的な言い回しで表現されることになる。

言うまでもなく、他ならぬ、この、諸対象が違っているということは、「それらに」両立不可能な属性が存しているということであり、かつ、他ならぬ、この、諸対象が違っていることの原因は、「それらを生み出している」原因が違っているということである。その双方が「諸対象の」違いをもたらすものでないならば、その場合、何も、如何なるものからも、差別化されないということになる。従つて、⁽¹⁰⁾全てが同一の実体であるということになってしまう。

Dhamakiri は、対象 x と対象 y とが違うとは、 x と y とがそれぞれ両立不可能な属性をもっていることであると言う。つまり、彼にとって、緑色のバナナと黄色のバナナは違う対象であるに他ならない。このように仏教思想家は両立不可能な属性をもつことを対象そのものが異なることとして端的に解釈する。変化とはステージが別になることであるとすると *stage theory* の立場は、結果論的には、この仏教徒の考え方と同じであることは明白である。

緑色のバナナと黄色のバナナは別であると理解する双方であるが、筆者の考えでは、*stage theory* の提唱者たちの議論にはなく、仏教徒たちの議論に見られる特徴的な点は、対象が別になる、換言すれば、ステージが移り変わるときに、それを可能とする存在論的な条件が彼らによって考究されているということである。そして、この移り変わりの存在論的な条件として仏教徒が主張するのが利那の不可分性である。

四 瞬間（利那）と可分性・不可分性

1 利那滅説

仏教思想家は対象が別になるとは、前のものが滅して新しいものが生じることであると解する。そして対象が仮に僅か一刹那間だけであったとしても存続するならば、その対象は永久にそのまま留まらなければならぬと主張する。Dhamakiri の有力な後継者 Dharmottara（八世紀後半頃）は言う。

「対象が、たった一刹那間であっても存続するという本性をもっているとするならば、」一刹那間だけ存続するというのだから、再び一刹那間だけ「対象は」存続するだろう。これゆえに、一刹那間だけ存続するという本性はいつまでもたつても尽きないのだから、「対象は」永久に在り続けるという結果になる¹⁾。

僅か一刹那であっても時間的な幅・量をもって存続するという性質を対象がもっているならば、その対象はその性質ゆえにその時間的な幅・量分だけ繰り返し存続することになるので、永久に存在し続ける、というのが彼の主張である。即ち、瞬間に分量を認めると、当該の対象は別になることが永久に不可能となる。この立場に従えば、緑色のバナナがその状態をもって僅か一刹那間であっても存続するならば、バナナは永遠に緑色であって、黄色には絶対に移り変わらない。黄色のバナナが生じたということは、緑色のバナナは生じた後一刹那間も留まらず瞬時に滅し、それと同時に黄色のバナナが生じたということである。以上の立場から Dharmottara は利那を以下のように規定する。

前と後とをもたない時間が利那と言われる。そして、それゆえに、「対象が」存在している時間、それこそが一刹那なのである。¹⁾

その時間に対して前と後の部分を定立することが不可能で

あるところの「時間」、前と後のふたつの部分をもたない利那と言われるものがそれである。⁽¹³⁾

対象が存在している時間が利那という名で呼ばれる。そしてそれには分量がない。分量があれば、対象は永久にそのままであって、別になることはない。このようにして、仏教徒は対象の移り変わりの存在論的条件として利那における滅と利那の不可分性を主張する。

2 Stage Theory

他方の Stage theory では、瞬間の分量の問題は全く異なる角度から検討される。本研究において筆者が注目したいのは Hawley の以下の言明である。

Perdurantism theory は stage theory には必要のない余計な義務を負っている。Perdurantism theory は時間的諸部分の集合体の存在に拘束されているのである。というのも、日常生活における通常の対象として想定されているのは、他でもないまさにこれらの集合体だからである。だがしかし、perdurantism theory を採る者たちが瞬間的な時間的諸部分の存在にも同じようにして拘束されていると仮定すれば、彼らは、それだからこそ、広がりをもたない諸瞬間が有限でしかし広がりのある、時間の諸区間を構成することができるように、瞬間的な諸々のものが、どのようにして、有限でしかし広がりをもったサイズの集合体をもつことが出来るのかを説明せねばならない。Stage theory はこの点に

ついて中立的なままできていることができる。もしも瞬間的な諸ステージについて、それらが広がりをもった融合物、あるいは集合体をもつと考えることが有意義ならば、その場合には stage theory を採る者たちはそれらの諸集合体を認めることができる。しかし、そうでないならば、その場合には問題は起らない。というのも、stage theory によれば、諸ステージの集合体は我々の日常上の存在論においては重大な役割を果たさないからである。それに対して、perdurantism theory を採る者たちは、そのような融合物の存在を確立しなければならない。というのも、他でもないそういった諸融合物こそがよりふれた普通の諸対象として想定されているのだから。⁽¹⁴⁾

Hawley が問題とするのは、瞬間が広がりをもたない、つまりは無部分である場合、それらが集合体を構成できるのか、ということである。無部分のものが分量ある集合体を構成するのは矛盾である。perdurantism も stage theory も、四次元主義存在論を前提とするがゆえに、この問題は看過されるべきではない。しかし、Hawley は、perdurantism は集合体の存在を必ず認めなければならないが、集合体を物質的対象として認めない stage theory では、それが有意義であれば認めるし、そうでなければそうしなくても問題はなし、としている。これは前述の矛盾を避けるための妙案と言えようが、この曖昧な態度は批判されて然るべきであろう。ここで注意すべきは、第二節におい

て考察した Hawley の議論、即ち、ステージは不変化でなくてはならないという主張である。ステージが無部分であるならば、ステージの不変化性は如何に解されるべきであろうか。即ち、Hawley によれば、瞬間をその長さとするステージはそこに対象の特定の状態が顕れるものとされ、なおかつ不変化であるとして置かれている。ステージが無部分であれば、不変化であるのは何かという問いが不可避となる。このことから考えれば、Hawley はステージに分量を認める方向に傾かざるをえないだろう。

五 結語——対話の焦点——

利那滅説は仏教の最重要教説の一つである諸行無常説を背景とし、無常の内容を論理的に突き詰めていったところに登場した考えである。そしてこの教説における無常とは、端的には、対象が終焉を迎えることに他ならない。対象の終焉を議論の出発点とする仏教思想家たちは対象のなくなり方に考察の力点を置く。対して、これまでの議論から明らかなように、stage theory の提唱者たちは、同一対象は如何にして両立不可能な属性をもつて時間の中を存続するのかという課題に取り組み中で stage theory を構築している。即ち、対象の存続が彼らの議論の前提である。正反対の前提をもつ両者が同じ結論の存在論に到達していることは比較思想を行う上で極めて興味深い。このことは、双方の議論の中心にある、同一の対象が時間の中で両

立不可能な属性をもつことの不合理性が、如何に普遍的な形而上学上の問題であるかを示していると言えるだろう。

タイムトラベルによって Dharmakīrti たちが現代に来ることが出来たとするならば、彼らと現代形而上学者たちとの対話の中心は、ステージに分量があった場合、或いは、Hawley が主張するように、ステージが不変化で、一瞬間とは言え自己同一性を保つものであった場合、ステージは如何にしてなくなり、次のステージに移り変わるのか、という問題になるはずである。利那に分量を認めない仏教徒の立場では、先立つステージは、発光すると同時におのずから消滅するフラッシュライトのように、おのずから消滅し、その消滅と同時に次のステージが生じると説明されるだろう。一方、ステージに自己同一性を認める stage theory では、ステージの移り変わりは、ピリヤード台の或る場所に留まっていたボールが、後から打たれ自らにぶつかった別のボールにその場所を譲るように、他律的なメカニズムをもつ移行として説明されるのではないだろうか。何れにせよ、瞬間（利那）に可分性を認める立場でも、認めない立場でも、立論者はそれ相応の論争上のコストを払わねばならないだろう。そして双方の哲学的対話ではそのコストの多寡を巡り熾烈な議論が展開されるだろう。これが筆者が描く双方の哲学的対話の予想図である。

※本研究は JSPS 科研費 17K18249 の助成を受けたものです。

- (1) 上の三理論の概略についてその上の論考を参照。Goswick, D. L. "Change and Identity over Time." In: *A Companion to the Philosophy of Time*, edited by Barton, A. and Dyke, H., West Sussex: John Wiley & Sons, Inc., 2013, pp.365–386. Haslanger, S. "Persistence Through Time." In: *The Oxford Handbook of Metaphysics*, edited by Loux, Michael J. and Dean W. Zimmerman, Oxford: Oxford University Press, 2005, pp.315–354.
- (2) 上の問題について Wasserman, R. "The Problem of Change." *Philosophy Compass* 1, 2006, pp.48–57 参照。
- (3) 上の本稿について *ibid.*, p.53 以下を Goswick, *op.cit.*, 369 参照。
- (4) David Lewis による批判の内容は Wasserman, R. "The Argument from Temporary Intrinsics." *Australasian Journal of Philosophy* 81, 2003, pp.413–419 によって分析 検討されている。
- (5) 上の問題に Sider, Th. "The Stage View and Temporary Intrinsics." *Analysis* 60, 2000, pp.84–88 による詳細な説明を参照。
- (6) Hawley, K. *How Things Persist*, Oxford: Clarendon, 2001, p.48, 26–35.
- (7) Hawley 上の議論の詳細については *ibid.*, pp.48–50, p.52 参照。
- (8) Goswick, *op.cit.*, p.377, 25–27.
- (9) *Abhidharmakoshasya*. Ed. Pradhan, P. Patna: K.P. Jayaswal Research Institute, 1967, p.163, 9–10.
- (10) *Pramāṇavārtikasavayri*. Ed. Gholi, R. Rome: Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960, p.20, 21–23.
- (11) Sakai, M. *Dharmottaras Erklärung von Dharmakīrtis kṣāṅhikā-trāṇamānā: Pramāṇavārtikacyūta zu Pramāṇasūtraya 2 vv. 53–55 mit Prosa*. Ph.D. Dissertation, The University of Vienna, Wien, 2010, p.8, 10–13.
- (12) *ibid.*, p.9, 1–2.
- (13) Frauwallner, E. "Dharmottaras Kṣāṅhahutsiddhi. Text und Übersetzung." *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 42, 1935,

p.223, 7–9.

- (14) Hawley *op.cit.*, p.52, 20–35.
- (15) 当然ながら他の形而上学者たちは対象の瞬間性を主張する stage theory に対象の存続を否定する理論だとして批判する。Sider はこの種の批判に対し時間的対応者 (temporal counterpart) と呼ぶコンテキストを導入して解決を図る。Sider, *op.cit.* 参照。時間的対応者は Lewis が論じる様相対応者 (modal counterpart) に時間的要素を組み入れたものであり、Hawley も採用する。stage theory が対象の存続を説明できる理論であるための切り札である。このふたつの対応者の関係については Haslanger, *op.cit.*, p.318, 40–p.319, 4 の以下の説明を参照。「フサイッド・ルイスは哲学者になかったかもしれない」と考えてみよう。或る対応者理論においては「これが真であるのは、そこにおいてルイスが哲学の道に決している」という理由によるのではなく、別の可能世界にルイスが存在しているという理由によるのではなく、そうではなく、そこにおいてルイスの対応者が哲学の道に決して進まないところの、そのような世界が存在しているという理由から真なのである。同様にして、午前のまっすぐなロウソク (のステージ) は、午後の曲がったロウソク (のステージ) として存続している。それは、前のその対象それ自身が後の時間において存在しているということによってではなく、そうではなく、後のステージが、前のその対応者となつてくるという理由で、である。」一方、Sider 自身は以下のような例を用いて、現在のステージの、過去のステージとしての存続を説明している。「クリントンは軽率だっただ」という現時の言明は、以下の場合かつ以下の場合に限つてのみ真である。クリントンの (現時の) 指示対象——ステージ——が、過去における軽率である時間的対応者をもつている場合、である。」 Sider *op.cit.*, p.84, 14–16 参照。
- (16) かつ、まゆみち、仏教認識論・論理学、関西大学准教授)